

LIVE:スピードクライミング

1996.4.22 下村 SHELTER
5.12, 5.23 齋時 GEAR



photo by k.k

4月22日 SHELTERに EXISSを聴きに行ったときにはじめて見たのだが、ベース=ヴォーカルの人の極だった感じが印象的で、次のライブにも行ってみようと思った。このとき配られた4曲入りのデモテープも、真剣味がまっすぐに伝わってくる聴きごたえのあるものであった。

5月12日のGEARのライブは、前回の SHELTERのときより数段パワフルで、スピードクライミングのすごさが明確に現れたライブだった。スピードクライミングは、ギター=ヴォーカル、ベース=ヴォーカル、ドラムの3人編成。バンドというのは、何人編成でも、たいていベースとドラムがつくるリズムに、ギターがのって、それをバックにしたヴォーカルがフロントにある、というようになっているが、スピードクライミングはそうではなくて、ヴォーカル、ギター、ベース、ドラム、のそれぞれがおなじ重量で、独立して存在し、バックとかフロントとかいう感じがしない。

スピードクライミングは、その主体が3人でひとつの世界を創り出すというメンバー間のたがいの関係にあるのではなく、3人がそれぞれの独自の世界の中で、自分自身の力を頼りに、自分自身と闘うことに全力を尽くす、というところにあるのではないだろうか。

こうした状態で歌詞=言葉はどうかというところ、下に載せたデモテープの歌詞カードのコピーを見てもらうとわかるように、歌詞は短いものが多いのだが、その短い歌詞がくりかえしくりかえしたたみかけて歌われると、言葉がギリギリとネジ式に深く突き刺さってきて、いっしょになって叫びたくなるほどなのである。これは、EAT RED MEATのギター=ヴォーカル富田浩章に共通する強烈さである。

そして、「生きる証」(多分こういうタイトル)と、シド・ヴィシヤスの(と聞いていいのかわからないけれど)「マイ・ウェイ」になると、叫びたくなるのを超えて、深く沈黙させられる。ギター=ヴォーカルの人が歌う「生きる証」の「生きている証に生きる証をたてましよう/死ぬまでのあいだは死なないで」という歌詞は迫力である。思いをつきつめたところで獲得された言葉は、じつに独特で説得力がある。「生きる証」を聴いていると、これが自分自身の生きる証のたてかたなのだ、とでもいうように、体の内臓機関がポワッと燃え出してくるのが感じられる。

「マイ・ウェイ」は、フランク・シナトラ版の歌詞を日本語に訳したものだと思うが、ベース=ヴォーカルの人が歌うと、オリジナルとしか思えない。この「マイ・ウェイ」の衝撃は感動的で、その思いの深さと強さ、その真剣さ、そのつきぬけ方に圧倒されて、全身がふるえ涙があふれる。

本当に久しぶりにこういうライブに出会って、生き返ったような思いがする。

WORDS:ダニー・シュガーマン (「ガンズ・アンド・ローゼス/悪の華」より)

音楽が体内に鼓吹したパワーに酔いしれれば、すべての抑圧から解放されて音楽に身を任せることが可能になる。そして自分を止めがきかない段階にまで高揚させていけば、そのうち偉大な力の存在を発見することになる。これはひとつの解決法だ。明日ばかりか、死さえも壊滅させることができるのだ。そしてディオニュソスに触れたことがある(またはディオニュソス触れてもよい、と許可を得た)人ならば、音楽のひめたパワーに陶酔することにより、死をこの世から消し去ることだって可能になるだろう、という気になる——何ももの制することができなくなり、音楽は竜巻のように威力を発揮し、激動の渦中に身を投じた己れのまわりを包み、さらに大きく発展することだろう。すると誘惑が満ちて、この力強い勢力を我がものとし、支配しようとする欲が出る。頭から飛び込んで力の中心と一体となり、自分の味方につけて、しまいにはその動きにのってしまうのだ。それこそ、ロッカーのあるべき姿だ。こうあらねばならない。この衝動は直感的なもので、まるで子供が扇風機に指を突っ込もうとしたり、高い櫃の上を歩きながら空を飛ばしたい、もっと高い所へ行きたい、とジャンプしたりするのに似ている。これは恐ろしいことであり、同時に魅力的なことだ。そしてエキサイティングな気分になってくれ、なおかつ自分は生きているんだ、と活気が強のを感じるだろう。

LIVE:ロンサム・ダヴ・ウッドローズ 1996.2.25, 4.14, 5.12 齋時 GEAR

ロンサム・ダヴ・ウッドローズ(以下ウッドローズ)は、2月25日にGALLEY SLAVESを聴きにいって始めて知った。

はじめてのバンドを前にすると、ステージに出てきたメンバーの格好や様子で、「あーあ、カッコわるそうー」とか、「たぶん、〇〇みたいなんだろうなー」とか、「なんか、わけがわかんない」とか、めったにないけど「もしかしたら、いいかもしれない」とか、演奏がはじまらないうちから、あれこれ勝手にきめてつけて、はじめて見るのだからまったく白紙の状態、というわけにはなかなかいかない。

ウッドローズは、この日一番最後で、目当てのGALLEY SLAVESがその前に終わっていたから、「つまらなかつたら帰ればいいんだから」という軽い感じでステージに出てきたメンバーを見ていた。ヴォーカル、ギター2人、ベース、ドラム、の5人もそんなに若くはなくて、長くバンドをやっているらしく、「淡々としてさりげない」といったふんいきで、「いい感じ」というのが第一印象。

演奏がはじまると、ノリのいいロックンロールで、「どうだーっ!!」っていうおしつけがまじまじとあって、そう、「淡々としてさりげない」。大好きだったけど、すっかり忘れていたジョージ・サテライツを思い出させてくれたのもうれしかったし、「なかなかいいじゃない」。ところが、それははじめのほんのちょっとの間だけで、またたくまに、「なかなかいいじゃない」どころか、ウッドローズのロックンロールに体ごともっていかれてしまったのだ。まさに、ダニー・シュガーマンが「音楽が体内に鼓吹したパワーに酔いしれれば、すべての抑圧から解放されて音楽に身を任せることが可能になる」、「エキサイティングな気分になってくれ、なおかつ自分は生きているんだ、と活気が強のを感じるだろう」と書いているとおりになったのである。(上記「WORDS」参照) なにが「淡々としてさりげない」だ。あー、自分のきめつけがこんなふうにはびっくりかえされるのって、なんていい気分なんだ!

この日でギターの人1人ぬけて、4月14日のライブは4人だったせいかそれほどでもなかったが、5月12日には新しいギターの人が入っていて、また2月のような楽しいライブだった。

POEM:「不利の中に」丸山 薫

青春は髪が伸びすぎて
青春は垢(あか)によごれている
青春は吃(く)つてばかりいる
青春は靴の底に釘(くわ)が出ている
(悔いの痛い釘が)
青春はポケットが抜けている
青春は腕が燃えている
なお そのうえ
青春は
青春は
青春は
青春は
青春は
青春は

不利の中に

丸山 薫

sideA

バットマン

あきらめきれないぜ
あきらめる必要はないぜ

ほらほらほらほら!
ほらほらほらほら!

金属バットは どこでも買えるさ
金属バットは どこでも手に入る

SEX

俺の中の女があふれ出して
お前の中の男が弾け飛ぶ
やっちなえ! やっちなえ! やっちなえ!

あの娘の中の男がよだれたらして
あいつの中の女がふるえてる
やろうぜ! やろうぜ! やろうぜ!

動きまくる朝の月
動きまくる朝の月
くねくね朝の月
動きまくる!

sideB

休日の行ない

ある晴れた休日の山手線の車内
俺の正面に座ったバンドマンの
茶色い茶色い長い髪の毛が
俺の背を刺さって

その夜俺は 月明り浴びて
その夜俺は 女をなぐりとばす

ざらついた舌と
汚れた右手と
意味のない涙と
そしてお前と

ギャオスの空

この空を切り裂く為
この空を血に染める為
この俺は生まれてきたのだ

天に轟き我が名は「ギャオス」
俺の叫びが世界を震えるぜ



ライブで配られたチラシ